

日本女大家政 大野静枝 多屋淑子 ◦林久美子
筑波大付属盲学校 綾ヤス子

目的 前報では、視覚障害者の衣生活に対する実態調査を実施し、正眼者との相違点、問題点を検討した。本研究では、視覚障害者の日常における着衣の機能性とその使い勝手の改善をはかることを目的として、数種の組合わせた衣服を用いて着用または、脱衣時の難易度を測定し、改善策を試みた。

方法 被験者は、視覚障害者の中学生、専攻科女子各4名と正眼者の女子学生4名でアイマスクの有無も兼ねた。着衣の種類は、市販既製服から選択した7種類の組合わせである。被験者は、気温23℃、気湿65%前後の空調室で安静にした後、用意された袋の中から、1組の着衣を取り出し、各自の習慣や好みに従って、1枚ずつ下着から着用するが、その都度、始めと終わりを告げさせ、正常に着装を終えた時刻、またさらに、脱衣してたたみ整えた時刻など測定した。測定項目は、着脱所要時間、単品衣服の着脱時間、着衣順序、前後、左右の区別などである。

結果 各組合わせの衣服の着脱所要時間は、視覚障害者中学生は、特に、着脱に時間を要し、個人差が顕著であった。視覚障害者専攻科生は、正眼者アイマスク使用者と同等または、それよりも短時間で着用し、視覚障害者でも年齢が進めば、その経験により所要時間は短くなる。しかし、正眼者に比較して2~4倍の時間を要するものもあった。着衣所要時間の多いものは、衣服の前後区別の判断し難いもの、開閉にファスナーを用いたものにみられた。前後区別の改善をラベル添付により視覚障害者に試みた結果、20~30%着衣所要時間が短縮された。